

一八八二年十月十六日(月)

タクール、聖ラーマクリシユナ

ドツキネーシヨル
南神においてナレンドラなど内輪の人々と共に

昔の話——聖ラーマクリシユナの最初の愛と歎びの話(一八五八年)

〔信者——クリシユナキシヨル、エンレダの聖者、ハラダリ、ジャティンドラ、ジャイ・ムクルジェー、
ラースマニ〕

今日、タクール、聖ラーマクリシユナはたいそう御機嫌がよろしい。ドツキネーシヨル南神村のカーリー神殿にナレンドラが来ているからだ。それに、何人かのごく親しい人々もいる。ナレンドラは神殿に参つて、沐浴ブラカドしてからお下がりをおいただいた。

今日はアツシン月の白分四日目。一八八二年十月十六日、月曜日。来るきた木曜の白分七日には、大聖ドウルガアの祭りがある。

タクール、聖ラーマクリシユナのそばにラカール、ラームラル、ハズラーがいる。ナレンドラといっしょに、二人ほどブラフマ会員の青年たちが来ていた。今日は校長も来ている。

ナレンドラはタクルのすぐそばで食事をした。食事の後、タクル、聖ラーマクリシユナは、ご自分の部屋の床に寢床をしつらえるようにおっしゃった。それで、マットの上に刺子さしこの掛け布団と枕が広げて敷かれた。タクルも子供のようにはしゃぎながら、ナレンドラのそばに坐まられた。信者たちやナレンドラ、特にナレンドラの方を向いてニコニコ顔で、さも嬉しそうに話をしておられる。ご自分のことについて、今まで経験されたことなどを話しておられる。

聖ラーマクリシユナ〔ナレンドラたち信者に向かつて〕わたしは、それからというものは（初めて三味を経験されてからは）、ただもう神様の話を聞きたくて夢中になっていたものだよ。バーガヴァタやアディヤートマ（ラーマヤナ）やマハーバータの話聞かせる場所を、あっちこっちと探し歩いた。エンレダのクリシユナキシヨルのところに、アディヤートマ（ラーマヤナ）の話をよく聞きに行ったものさ。

クリシユナキシヨルは、そりゃあ信念の強い人だったよ！ プリンダーヴァンにいた時分のことだが、ある日、水が飲みたくなって井戸のそばへ行行ったところが、一人の男が立っていた。水を汲んでくれ、と頼まれてその男は言った。『私めは低いカーストのもの、あなた様は最高のバラモン、あなた様のお飲みになるお水を汲んで差し上げるなどというもったいないことが、どうして私めに出来ましようか？』クリシユナキシヨルは言った。『シヴァの御名を称える。シヴァ、シヴァと称えれば穢けがれは浄まるから』その男は、シヴァ、シヴァと称えながら水を汲んで差し出した。そんなふうにして、厳格なバラモンである彼はその水を飲んだんだよ！ なんて信念が強いんだろうね！

エンレダの沐浴場に一人の聖者サードが来ていた。わたしらはある日のこと、その人に会いに行こうと考えた。わたしはカーリー神殿でハラダリに、『クリシュナキシヨルとわたしは聖者に会いに行く。お前も行こうよ!』と誘った。するとハラダリが言うには、『土で出来たオリをひとつ見に行くなんて、アホらしいじゃないですか』ハラダリはギターやヴェーダーンタ哲学の本を読んでいるからね! だから聖者のことを、土のオリだなんて言う。クリシュナキシヨルのところへ行つてわたしはこの話をした。あの人は怒つたの何のつて——こう言つたよ。『何だつて! ハラダリはそんな言葉を吐いたんですか? 神を想い、ラーマを想い、そのためにすべてを捨てている人の体のことを、土のオリだど! かれは、信仰篤い人の体は霊そのものだ』ということを知らんだ』すっかり怒つてしまつて、カーリー神殿に花を摘みにきてハラダリと会つても、プイと顔をそむけてしまふんだよ! 口をきくどころじゃない!

わたしに、『どうして聖糸を捨てたのですか?』ときいた。あの頃(はじめて見神した頃)はアツシン月の大嵐のなかにいるようで、何が舞い込んで何がどこへ飛んでいったものやら、皆目分からなかつたからね! それまでのいろんなことは何も残つてなかつた。この世の意識もなかつた! 着物を身に付けていようの、聖糸をちゃんと下げていようのなんてことが、どうして出来ただろう? わたしは言つた。『お前も一度、気が狂つてみればよくわかるよ!』

それが、そうなつたんだよ! あの人自身が氣違いのようになった。そのとき、あの人はただもう、クオーム、クオームとばかり言つて、一部屋に閉じこもっているきり、口もきかない。皆は頭がおか

しくなった、と思い込んでカヴィラージ（インドの伝統医学アーユルヴェータの医者）を呼んできた。ナタガルの医者ラーム・カヴィラージが来た。クリシュナキショルはかれに言ったそつだ。『もし、私の病気を治して下さい。でもよく気をつけて、私のオームは治さないようにして！』（一同笑う）

ある日行ってみたら、坐って考え込んでいる。『どうかしたのかい？』と聞いたら、『税金取りがやってきたので——それで考えているところです。税金を払わなかったら、壺やコップに至るまで競売つりあはすにする、と言ひ渡されたんです』と言う。わたしは言った。『それがどうした？ 壺やコップを持っていかれたってどうということもないだろう。どこでもほじくり返して、一切合切持つて行かせろ！ お前の体だつて、持つていきたくりやくれてやればいい。お前は空カじゃないか！』

ナレンドラ「アツハツハツハハ」

聖ラーマクリシュナ「クリシュナキショルはいつも、わたしは空カである、と言つていたからね。アディヤートマ（ラーマヤナ）をよく勉強していたからだろうよ！ 私はよく、お前は空カだから」と言つてからかったものだ。そのときも笑いながら言つたものだよ。空カのお前カを税金で縛るわけにはいかないだろうつて。（訳註、カー——アーカーシャ＝虚空の略）

狂気のような有様で、わたしは人々にありのままの言葉を——真理の話を語つたものだよ！ 誰に対しても区別なんかしなかつた。身分の高い人に会つても何の遠慮もしなかつた。

ジャドゥ・マリツクの莊園にジャティンドラ（カルカッタの貴族）が来ていた。わたしもそこに行つていた。わたしは彼に話しかけた——『人がしなければならぬことは何だろう？ 神について考えるこ

とこそ、わたしたちのしなければならぬことではないだろうか？」ジャティンドラは答えた。「我々は俗世の人間だからね。解脱などは高嶺たかねの花だよ！ ユディステイラ王さえ、地獄の有様を見ていなさったのだから！」それを聞いて、わたしは怒ってカーツとなった。「あんたはいったいどういう人なのかね、全く！ ユディステイラが地獄を見たことだけを覚えていたとはね？ ユディステイラの誠実だったこと、心の広いこと、冷静な識別、無欲、それに神信心、こういうことをみんな覚えていないとはね！」もつともつと言つてやるつもりだったが、フリダイ(侍者)がわたしの口をふさいでしまった！ ジャティンドラは少し間をおくと、『私はちよつと用があるので——』と言つていなくなつた。(訳註——ユディステイラはマハーバーラタに登場するパーンドウ五王子の長兄、アルジュナは第三子)

だいぶ経つてから大佐(キツネ)(ヴィシユワナート)といつしよに、ラージャヤ・ソーリンドラ・タゴールの御殿に行つた。彼に会つと、先づこつと言つたよ。『お前さまのことを、ラージャだのタージャだのとわたしは呼べない。なぜかと言えば、それはウソの言葉になるからね』わたしと何分か話をしたが、後から後から西洋人だの何だのがうるさく出入りし始めた。ラジャス性の人なので、いろいろな仕事を持っているのだ。ジャティンドラ(彼の長兄)に、わたしが来ていることを報らせてやつたが、彼は『私はいにく喉が痛くて……』と言つてよこした。

そんな狂気の状態のときに、またある日のこと、バラナゴルの沐浴場(ガト)に行つてみたら、ジャイ・ムクルジェー(がいて)がいて称名をしていた。ところが心じゃ、別のことを考えているんだ！ すぐそばへ行つて、二度、平手打ちを食わせてやつたよ。

ラースマニ（カーリー寺院の所有者）が神殿に来ていた日のこと、わたしがカーリー殿で礼拝しているところへ入ってきて、一つ、二つ、歌を聞かせて下さい、と言う。歌をうたいながら、見ると、ほかのことを考えながら花をより分けている。すぐさまピシヤリ、ピシヤリと叩いてやった。すっかりまごついて、手を合せて突っ立っていったっけ。

ハラダリ（年上の従兄弟）に言ったものだよ。『兄さん、わたしはどうしてこんなひどい性質になってしまったんだろう！ どうしたらいいだろう』それで、大実母に一心不乱にお願いして、その性質を直してもらった。

〔マトゥールと共に巡礼（一八六八年）——ベナレスで世間話を聞いてタクルの号泣〕

いま言ったような状態のときには、神様の話のほかは何の関心もないのだ。俗っぽい話をしているのを聞くと、坐り込んで泣き出したものだ。マトゥール旦那といっしょに聖地詣で行ったとき、ベナレス（カーシー）でラージャ旦那の家に何日か泊まった。マトゥール旦那といっしょに応接間に坐っていて、ラージャ旦那やほかの人も坐っていたときだ。皆は世間話をしていた。金をいくら損したとか、そんな話なんだ。私はとうとう泣き出した。『大実母、どこへ連れてきてくれたのですか。わたしはラースマニの寺で幸せにしている、わざわざ聖地詣りに来たというのに、あんな女と金の話を聞かされるなんて——。あちらにいれば世間話など聞かないで済むのに』

タクルは信者たち、ことにナレンドラに向かって、「少し休もう」とおっしゃった。そしてご自身も

小ベッドでお休みになった。

讚神歌のよろこびをナレンドラと共に——ナレンドラへ愛の抱擁

夕暮れになって、ナレンドラが歌をうたっている。ラカール、ラトウ、校長、ナレンドラのブラマ協会での友人プリヤ、ハズラー等がいる。

ナレンドラは讚神歌をうたい、横太鼓コイルで伴奏がつけられた——

ハリ——ヴィシユヌ神の別名

きよらかな聖なるハリを

わがこころ 想いこがれぬ

その光 くらぶるもなく

その相すがた いと麗しくうるわ

信者まめひとの胸むねよろこばす

新しき この無上の愛に

百万の月 色も褪あせたり

ああ かの光 電光いながまとひらめき

身もこころも 震えおののく

かの君の 蓮の御足を
わが胸に しかと抱きぬ
安らげく 愛のまなざし
なつかしく やさしきものよ

大霊の甘露の水に
信愛の衣まといて
いざ浸れ
永遠のよろこび

ナレンドラはまた歌った――

サティヤム シワラム スンダラム
真・善・美 わが胸に麗しく輝き
日ごと夜ごと 美の海に われ沈むは
ああ そはいつの日か 主よあわれみ給え

かぎりなき 智慧となりて主よ

わが胸に 入り給えば

さわがしき心 静まりて

聖なる御足の下に安らぐ

平安なるシヴァ 二つなき王のなかの王の御足に

わがすべてを 捧げつくしてこそ

この人生 いのち いきて光榮 はえあり

かくも力強き言葉と 天上の歓喜を

この肉身 みのままに 主より受け

罪 つとがれ ことごとく清められ

主の光にあいて 闇は疾 とく逃げ去る

日昇りて チャコラ鳥のあそぶ如く

心いきいきと楽しく 自在に翔けめぐること

不滅の喜びは わが胸の大空に

主よ 顕れ給え

ああ 北極星のごとく 胸に燃える信念を
更に燃え立たせて 憐れなる友をなぐさめ
日も夜も終わらなき歓喜に浸り

君を得ては われ自らを忘れ去る

ああ そはいつの日か――

次の歌――

よろこびの唇もて 甘き梵の名を称えよ

唱うれば沸きこぼる 美酒の海

常に飲みて 諸人に分ち与えよ

はかなき世の夢に 馳せつかれて

心 渴きなば かの御名を唱えよ

かぐわしき愛の甘露水 たれを癒さん

ああ この大真言オホマコト ゆめにも忘れず
 危うきときは かの慈悲オノチふかき大御父オホミコをよべ
 勇ましき雄叫びに 罪の鎖は碎け散る

栄光ハエあれブラフマン 栄光ハエあれブラフマン

いざ 梵ハの喜びに すべてハの望み果し

いざ 愛アヒマの道ミチの行者ヨウギとならんかな

梵——絶対、無限

横太鼓コウとカルタルル(小さいシンバル)の伴奏で讚神歌キレルカが始まった。ナレンドラたち信者一同は、タクールのまわりをぐるぐる廻りながら歌った。大霊カミの水ミきよらかに甘く 君よ浸れ 永遠トコのよろこびを歌ったり、真理マコトなるシヴァシバわが胸ウラに麗うるわしく輝きらきを歌ったりした。

しまいにナレンドラは、自分で横太鼓コウをもつて鳴らしながら、すっかり興奮した様子でタクールといっしょになって歌っていた——「よろこびの唇くちびるもて 甘あまき梵ハの名ナを称ほえよ」

讚神歌が終わっても、タクールはナレンドラを長いことそばから離はなさずに、何度ナンも何度ナンも抱かきしめておられた！ こう、おっしゃりながら——『お前は今日、わたしをほんとに喜よろこばせてくれたよ!!』

今日は、タクールの胸深くからの愛の泉いづみが湧わきこぼれていた。夜も八時ころになったが、まだ愛の

喜びに酔ったように、ただひとりベランダを歩きつ戻りつしておられた。北の長ベランダに行つて、足早に一方の隅から反対側の隅に歩いておられる。時々、大実母^{ママ}と何かお話をしていらっしゃる。突然、気が違ったように声を上げられた。『お前がわたしに、何をしようというのだ?』

大実母^{ママ}がいつも護つて助けて下さるのだから、マーマー(造化現象)も自分に対して何ができるか、という言葉だったのだろうか?!

ナレンドラ、校長、プリヤが泊まつてくことになった。ナレンドラが泊まるというので、タクールは際限もなく喜んでいらっしゃる。夜食の支度である。大聖母^{シロシロママ}(ホーリーマザー)が音楽塔^{ナハバト}に住まつておられた。ルチ(インド風パン)やひら豆のスープなどをこしらえて、信者たちが食べるようにと持たせて下さった。信者たちは時々こちらに泊まつていく。スレンドラが毎月、費用の一部を出している。食事の支度は、タクールの部屋の東南のベランダに並べられた。

〔ナレンドラ等に対して、学校その他の世間話を禁止〕

部屋の東側の入口のそばで、ナレンドラたちが雑談をしていた。

ナレンドラ「近頃の青少年について、どんなふうと考えておられますか?」

校長「まあまあ、ということでしょうが、それにしても、宗教的なものに対する関心が、きわめて乏しいですね」

ナレンドラ「私を見るところでは、おおかたのものは墮落していると思うんです。あちこちうろつ

いたり、浅薄な冗談を言い合ったり、おしゃれをしたり、学校をさぼったり、年中こんなことばかりしていますよ。悪所通いさえ、時にはしています」

校長「われわれの学生時代には、そういうのは見たことも聞いたこともありませんなあ」

ナレンドラ「多分、あなたは学生仲間とあまり交際しておられなかったでしょう。不道德わづらひな人名前を呼び合っているのを見たこともあるし——。何を話しているものやら」

校長「驚いたなあ！」

ナレンドラ「私は知っていますが、よくない習慣を持っているものも大ぜいいるんですよ。学校の当局者たちも、青少年の保護者たちも、よくよくこの問題を見つめて注意しなけりやダメです」

〔神の話こそが話すべき話——『知るは真我マイトマのみ、他の言葉は棄て去るべし』〕

このような話をしていると、タクール、聖ラーマクリシユナが部屋の中ほどから彼等のそばにやってこられて、ニコニコ顔で尋ねられた。

「何だい？ お前たち、いったい何の話をしているんだね？」

ナレンドラが答えた。

「この人と、学校の話やなにかをしゃべっていました。青少年の傾向が、どうもよくありませんので、タクールはそんな話を少し聞いて、校長に向かつてきびしい調子でこう言われた。

「こんなおしゃべりはよくないね。神様の話以外の話はみんなよくない。お前はこの子たちより年長

で考えも深いんだから、こんなくだらんおしゃべりをしないように、お前から気を付けなければいけないんだよ」(当時ナレンドラは十九、二〇才、校長は二十七、八才)

校長はすっかりうろたえた。ナレンドラはじめ信者一同はシユンとなつてしまった。

やがて、タクール、聖ラーマクリシユナはご自分は立ったまま、機嫌よく笑いながら、ナレンドラたち信者一同に食べ物をつるまつておられる。ともかく、今日のタクールはすこぶる御機嫌がよろしい。

ナレンドラたちは食事を済ませたあと、タクールの部屋の床に坐つてくつろぎながら、タクールといろいろな話をした。その愉快なこと、まるで歓喜よろこびの市場にでも坐つていようである。話をなさりながら、ナレンドラに向かつてタクールがおっしゃる。

「心の大空チダールカールシヤに愛の満月は昇る——この歌を、今度は歌つておくれ」

ナレンドラは歌いはじめた。自然、ほかの信者たちは、横太鼓ヨコウダとカルタルを鳴らして伴奏をつけた。

おお、心の大空チダールカールシヤに 愛の満月ゆたかに昇り

おお、愛の海原 よろこびに満ちあふる

恵みの御母に栄光あれ(ジャヤ・ダヤー・マイー)、恵みの御母に栄光あれ

信者の星々 キラキラと四方よもに輝き

おお、勝れたる友(神)は 信者と睦むつみあそぶ

恵みの御母に栄光あれ(ジャヤ・ダヤー・マイー)、恵みの御母に栄光あれ
天国の門開きて 歓喜の大波打ちよせ

新しき日の 春風はそよ吹きて

花咲く愛の芳香かおり やわらかに漂たよい

おお、その香に ヨーギーの群れ集つどいて 歓喜に酔よう

恵みの御母に栄光あれ(ジャヤ・ダヤー・マイー)、恵みの御母に栄光あれ、恵みの御母に栄光あれ
情感の海の法則の蓮華に 歓喜カーリー・ドゥルガーの女神は現在いまし

狂喜の信者は蜂の群れとなりて その甘き蜜を飲いむ

見よ、大実母はの輝はく顔容かんほせ 満みちたりて美しく

蓮華の御足の下 聖者たちは舞まい踊おどる

ああ、われ見たり 類たぐひなく素晴すはらしき生命いのちの調和

プレーマードース言いえり 諸人もろびとうたえ 大実母の栄光を

讃歌を歌いながら、タクール、聖ラーマクリシュナは踊おどっていらつしゃる。信者たちもタクールの周りをグルグルと踊おどっている。

讃神歌が終わると、タクールは北東のベランダを行いったり来きたりしている。ハズラー氏がベランダの北側に坐まっている。タクールはそこへ行いかれてお坐まりになった。校長もそこにずまと坐まっていて、

ハズラーと話をしていたのである。タクルルは一人の信者に尋ねられた——「お前、夢を見るかい？」
信者「近ごろ、すこし妙な夢を見たのです。この世界が水また水で、際限もなく水で一杯なのですよ！
いくつか小舟が浮かんでいましたが、大波が寄せて来て、あつという間に沈んでしまいました。私と、
あと何人かは汽船に乗っています。ふと見ると、その向こう岸も見えない広い広い海の上を、一人の
バラモンが歩いているのです。私は、『あなた様はどんなふうにして水の上を歩いていらつしやるの
ですか？』つってお聞きしました。バラモンはニコツと笑つて、『ちつとも難しいことはないよ。水の
下に、ずーっと橋が渡してあるのだ』とおっしゃいます。また、『どこへ行かれるのですか？』とお
聞きすると、その御方は、『バヴァーニープル（母なる神の都）へ行くところだ』とおっしゃいました。
私は申しました。『ちよつと待つて下さい。私も』一緒にいきますから——』」
聖ラーマクリシュナ「そんな話を聞くと、わたしや鳥肌が立つんだ」
信者「バラモンはこうおっしゃいました。『私は今、急いでいるのだ。船から下りるのに時間ひまがか
かるだろう！ さようなら。この道をよく見ておきなさい。そして後から来なさい』」
聖ラーマクリシュナ「鳥肌が立ってきた！ お前、大急ぎでマントラを受けなさい」
夜も十一時になるうとしてしている。ナレンドラはじめ信者たちは、タクルルの部屋の床に寢床をつくり
眠りについた。